

童話の執筆を通して子供たちにキリストの解放のメッセージを伝えることが、山村の伝道であつたと言ふことができるかも知れない。

賀川豊彦の悪概念

ステイツグ・リンダバーグ

本発表は、独創的な宗教家であり芸術家であつた賀川豊彦（一八八八—一九六〇）の思想における「芸術としての悪」を考察するものである。発表の構成は、賀川の悪概念と宗教観を概略的に紹介した上、彼の「芸術としての悪」の観念をつぶさに分析する形になる。資料としては『賀川豊彦全集』を主なテクストとする。そうすることによって、古今の科学においても宗教哲学においても解明が困難な「悪」という問題について、賀川という一人の人間が大きな代価を払つて構想した思想の意義が明らかになるものと思う。まさに自然災害や社会搅乱に苦闘している今日の状況において、賀川の「芸術としての悪」理解がその中に摸索しながら生きて行こうとしている人々にとつて何らかの手掛りになることを期待したい。

「悪」は、賀川豊彦が一生をかけて追究した第一の問題であった。彼の記述によれば「悪」は自身の宇宙目的論への思索の土台であり、そして発表者の考え方では、彼のキリスト教への帰依の主たる動機でもあつた。逆境の中に育つた賀川が、その悲惨と精神的な重荷からひたすら解放されることを希求したこと

は、容易に想像できるであろう。一個の自覚する生体を包んでいる宇宙には「果たして整然とした目的と意匠があるのか」と少年の賀川は自問自答したに違いない。自然界の目的論を拒むダーウィンの学説や古くから日本に深く根を張った仏教の因果説についても思索を巡らしたであろう。

生涯イエス・キリストの名を唱え続けた賀川であつたが、彼独特の「目的論的な進化論」を断念することなく標榜したことは、彼の特色の一つと言わざるを得ないであろう。つまり賀川は、当時厳しく対立すると考えられていた科学と宗教とを相反するものと見るのでなく、相補うものとして見たのである。一方、常に進化する生命（賀川によればそれは生命が「伸び上がる」とする事）には、不可避的に「ズレ」乃至は「故障」が生じざるを得ないと賀川は考える。しかし他方で賀川は、彼の深い科学の知見や聖書理解に基づいて、いわゆる「生命の最高の法則と見なされる〈連帯責任〉と〈贖罪愛〉」を構想していく。即ち、悪は生命の内容を構成し又進化させるという役割を担つてているのである。論者の考えるところでは、賀川が「悪」を結局「芸術」と考えたのは、彼の理想主義と現実主義の相俟つた結果なのである。

時には「警告」として、時には「酵素」として、「悪」はその「自己殿堂」に作用し、自我の脱構築と再構築という過程の手助けになる。このようにして、「警告」或いは「酵素」と表象される悪とその副作用である「苦」とは、信仰（とそれに伴う努力）と科学を通して宇宙の目的を確信したときにはじめて、ようやく「芸術」の世界に入り口となるのである。